



第 49 回 「折々のことば」とその付録の言葉

朝日新聞朝刊第一面に連載中の「折々のことば」は鷲田清一氏による名言の紹介コラムです。そのいくつかは科学の独創的研究につながる内容の記事です。以下ではそのいくつかを紹介しましょう。

(1)2016年6月1日掲載「日本は一位とか二位とかを争う野暮な国じゃなくていい。「別品」の国でありたいと思うのです。」(天野祐吉「成長から成熟へ」より)

外国に多くのライバルがいることを誇り、流行を追う研究をするよりも、自身が生み出した研究を追及することに価値があると思います。上記の名言はそれに通ずるところがあります。

(2)2017年3月26日掲載「ぼくを研究に駆り立てていたのは、じつにつまらない「うれしさ」だった。」(日高敏隆「生きものの流儀」より)

本記事ではさらに、「業績ばかり問題にされるが、自分を突き動かしてきたのはデータ化できないワクワク感」と補足しています。流行している研究に追随し needs にこたえて業績を上げるよりも、自分自身が見つけ出したテーマを追求する方が「うれしく」また「突き動かされ」ますね。これを言い換えると「独創的な wants の研究」です。

(3)2017年7月28日掲載「潰れない選手、伸びる選手には、共通点がある。・・・それは、孤独な時間をきちんと過ごせることだ。」(森繁和「参謀」より)

勉強や研究を深く掘り下げるには、多くの仲間とワイワイ議論するだけではなく、一人孤独で思索をつづけることが有効、ということでしょう。

(4)2018年5月23日掲載「なんでもないことは流行に従う、重大なことは道徳に従う。芸術のことは自分に従う。」(小津安二郎「酒は古いほど味がよい」より)

「なんでもないこと」を「流行している研究」に、「芸術」を「独創的な研究」に読み替えると、ごもつとも、という感じになります。

(5)2020年12月1日掲載「出会った事例が、はめこもうとしても定義の枠をあふれるとき、手ごたえを感じるのが、学問を担う態度として適切だ。」(鶴見俊輔「思い出袋」より)

オフシエル科学はオンシエル科学の定義の枠にははまりません。従来のオンシエル科学の枠からあふれ、オフシエル科学に由来する実験結果(実例)に出会うとまさに手応えを感じます。

(6)2022年1月30日掲載「いちばん必要なのは「わかっている」人ではなくて、現役でやっている人、つまり今でも「わかろうとしている人」です。」(五味太郎「大人問題」より)

若年の時に先進国で流行している研究に追随して業績を上げ、その後は「わかっている」という顔をして過去の業績にすぎた人よりも、自身が生み出した研究を追及し続ける人に価値があるということでしょう。研究が独創的であるほど、次々にわからないことが見付き、それを「わかろうとする」気持ちが湧いてきます。研究はいつまでも続くのです。

(7)2022年2月3日掲載「人間はその数だけ、それぞれ、その姿のまま誇らしくなければならぬ。」(岡本太郎「太郎に訊け！岡本太郎流爆発人生相談」より)

このコラムには上記(6)に通じる内容が含まれています。本記事ではさらに、「順位に関係なく、独り、高くそびえ立っている人間こそ頼もしい。成績は悪くても人間的には誰も負けていないという人がいたら、それもまだ順位に囚われている。」と補足しています。独創的な研究をする人は順位に関係なく孤高の立場をとるでしょう。しかし「人間的にも負けていないぞ」と考えるようではまだ修行不足ということですね。

さて、以上の「折々のことば」の内容とつながる記事が朝日新聞の他の欄にも掲載されていました。それを付録として二つ紹介しましょう。

【付録1】2018年8月日朝刊32面「福岡伸一の動的平衡」欄掲載「人文知の力 忘れていないか」では「自然は本来、混沌、無秩序で、常に変化し、しかも毎回異なるものだ。それをモデル化し、数式に置き換え、再現性のある法則とするのが物理学だ。しかしそれは自然を無理やりそうみなしているにすぎない。その自覚を持つのが科学者のはずだが、多くは自然を分解・分析・定式化することに夢中で、本来の自然に戻ることがを忘れている。」と指摘しています。これは複雑系の物理学、生物学などを研究する際に重要な指摘ですが、一般的な物理分野の研究にもあてはまります。長年にわたり研究された課題は見事に数式化されたモデルにより説明されていますが、思わぬところから新しい実験データが得られるとそれを説明できません。しかしそれこそが新しい研究のネタとなるのです。そこで本来の「自然」に戻ることが必須ですね。それを怠り、実験データを否定してしまったりすると未来へとつながる道を閉ざすことになります。

【付録2】2019年5月7日夕刊1面「紙つぶて」欄掲載「山本尚 「ゲーム・チェンジング」」では、アジアの国々の研究者が著名な雑誌に多くの論文を書いているが、引用値だけで測ってはゲーム・チェンジングはできない。世界の研究の源流となるような、創造性が高く、産業界などへの波及効果の大きな研究が必要。それには自我や当然と思っているルールを自分の中から追い出し、自然の教えてくれることに素直に耳を傾ける時に、ふいにわかるものである。」と記しています。これは上記の付録1とも共通する考え方だと思います。新しい研究をするには当然のルールから脱して考え直すことが必要ですね。なお、これは欧米先進国ではすでに気づかれており、米国ではこれを「破壊的イノベーション」と呼んでいるそうです。ということはこの記事の著者は欧米先進国の考えを輸入・紹介しているのかな？